

縮尺指導をめぐって「それぞれの地図にある“ものさし”を使って地図上の長さを測ると、実際の距離がわかります」と説明があるのですが…どのような手順ですすめればよいのでしょうか？

回答者 東京学芸大学名誉教授 次山 信男

**“かんたんものさし”を作って  
各地図の2点間の“距離”で比べる  
ことから！**

はじめて社会科地図帳を手にした4年生の子どもたちは、「日本列島を見わたす地図」、それぞれの地方が「見わたせる地図」、そして、東京や大阪、名古屋、北九州を中心とした「くわしい地図」があることを発見し、自分たちの県（都・道・府）に目を向けながら、それぞれ地図を見比べはじめます。

このような子どもたちの動きが、“縮尺”の指導のチャンスです。ここでも、はじめから各図についている「何万分の1」という“ものさし”に目を向けさせるのではなく、まず、子どもたちがそれぞれの地図の何を、どのように見比べているかに注目して見ることです。

見ていると、自分がもっている定規（cm）で、それぞれの地図のAとB、2点間の“長さ”を測って比べている子どもも出てきます。たとえば、近畿地方の地図で大阪市と隣の神戸市の間は3cm、くわしい地図では6cmという数字でとらえます。

「近畿地方の地図は“長さ”が、くわしい地図の半分になっている！」

『では東京都と隣の千葉市の間はどうか？』

「4cmと8cmで、やっぱり半分だ！」

このような子どもたちの動きを見届けたところで、〇〇地方の地図の“ものさし”にある「地図上の1cmは10km」と、くわしい地図の“ものさ

し”にある「地図上の1cmは5km」に目を向けさせていきます。

「ああ、だから、〇〇地方の地図は“長さ”が半分になるんだ！」

しかし、このことを4年生の子どもたちに、直ちに“100万分の1”と“50万分の1”の關係に結びつけることはできません。が、それでもこの段階で、子どもたちの中に「同じ地域を広げて表すと、地域のくわしい地図が…」、そして、「縮めて表すと、まわりの地域まで広げた地図が…」という、地図を“広げたり”“縮めたり”という“縮尺”の關係が見えてくるように思うのです。そして、「それぞれの地図に示してある“ものさし”が、その“縮尺”の關係を示しているのだ！」と、そこに目を向けていくようになるのではないのでしょうか。

ですから、地図帳の8～10ページのような“かんたんものさし”を作って、それぞれの地図の2点間の距離を測ったり、コンパスを利用して等距離の範囲を括ったりして、地図の中に入り込んでいく子どもたちを見届けてみては、いかがでしょうか。

